

令和4年度「とちぎっ子学習状況調査」の結果概要について

宇都宮市立国本中学校

家庭や地域から「信頼される学校」であるためには、学校の状況や生徒の実態を保護者や地域の方々に十分御理解いただく必要があります。その上で、家庭や地域と一体となって生徒を育てることが大切であると考えています。

こうした考えから、令和4年度「とちぎっ子学習状況調査」における本校生徒の学力や学習状況の概要について、以下のとおり公表します。

また、調査結果は、学習指導の工夫・改善に役立てることが大切ですので、調査結果の分析、指導の改善策などを併せて掲載します。

【調査の概要】

1 目的

本県児童生徒の学力や学習の状況等を把握・分析し、児童生徒一人一人の課題を明確にするとともに、各学校が組織的に学習指導における検証改善サイクルの構築・運用に取り組むことにより、本県児童生徒の学力向上に資する。

2 調査期日

令和4年4月19日(火)

3 調査対象

小学校 第4学年、第5学年（国語、算数、理科、質問紙）

中学校 第2学年（国語、社会、数学、理科、英語、質問紙）

4 本校の実施状況

第2学年	国語	123人	社会	123人	数学	122人
	理科	120人	英語	120人		

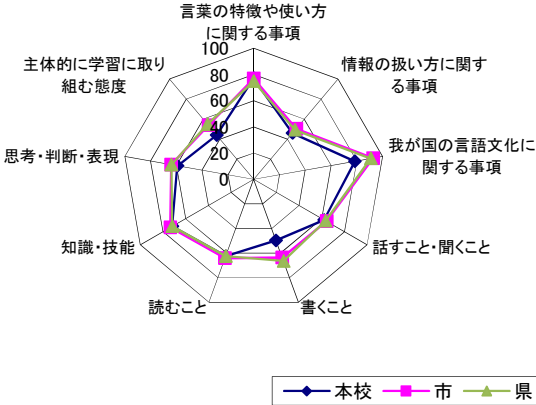
5 留意事項

- (1) 本調査は、対象となる学年、実施教科が限られていることや、必ずしも学習指導要領全体を網羅するものでないことなどから、本調査の結果については、生徒が身に付けるべき学力の特定の一部であることに留意することが必要となる。
- (2) 本校の傾向等を分かりやすく示すために分類・区分別の平均正答率などを公表した。
- (3) 平均正答率の数値は調査結果のすべてを表すものではないため、「本年度の状況」、
「今後の指導の重点」などの分析を併せて記載した。

宇都宮市立国本中学校 第2学年【国語】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	言葉の特徴や使い方にに関する事項	77.0	76.9	74.9
	情報の扱い方にに関する事項	45.9	50.3	49.2
	我が国の言語文化に関する事項	78.5	92.6	90.7
	話すこと・聞くこと	62.1	64.2	63.4
	書くこと	49.8	63.7	66.4
	読むこと	62.5	64.2	62.5
観点	知識・技能	72.0	73.7	71.9
	思考・判断・表現	59.2	64.1	63.8
	主体的に学習に取り組む態度	44.1	53.8	54.8



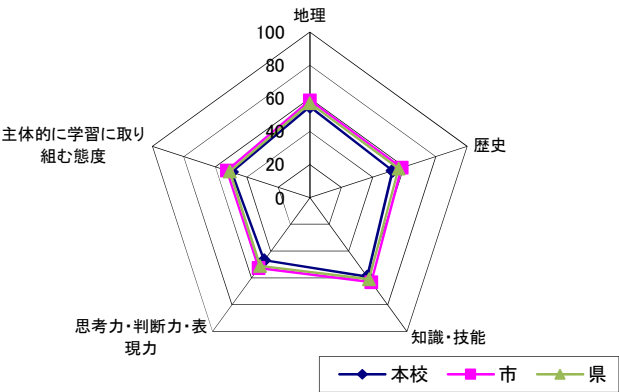
★指導の工夫と改善

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
言葉の特徴や使い方にに関する事項	平均正答率は、市の平均よりも0.1ポイント、県より2.1ポイント高い傾向がある。 ○既習漢字や文法、故事成語など言葉に関する内容についての正答率が高い。これは朝の読書で言葉に親しむ習慣や漢字の書き取りの補助教材を使っている学習が功を奏していると思われる。 ●平均としては良好な結果ではあるが、漢字の書き取りや慣用句などに苦手意識をもっている生徒もいる。	○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの ・朝の読書で言葉に親しむ習慣や、漢字の書き取りの補助教材を使っている学習が効果があるので今後も継続していく予定。 ・中一までの学習内容の定着を図るために、繰り返し復習の機会を必要とする。
情報の扱い方にに関する事項	平均正答率は、市の平均よりも4.9ポイント、県より3.3ポイント下回っている。 ○「情報と情報との関係について理解し、必要な情報に着目して内容を解釈する」設問については比較的良い結果が出ている。 ●「情報と情報との関係について理解し、自分の考えが明確になるように、話の構成を考えている」設問については県の平均を5.1ポイント下回っている。自分の考えを表現する設問に苦手意識を持っている生徒が多いという結果がうかがえる。	・情報内容の解釈は概ね出来ているが、ただ読み取るだけにとどまっている。今後は説明文などで同様の問題に多く触れさせていく。 ・たくさんの情報から必要な情報を取捨選択し、自分の考えと合わせて再構成していくという経験値が極めて少ない。このような学習の場面を何度か設定する。
我が国の言語文化に関する事項	平均正答率は、市の平均よりも14.1ポイント、県より12.2ポイント下回っている。 ○歴史的仮名遣いの設問が2つ出題され、完答での得点であり、片方は正解しているものもいた。 ●古典そのものに苦手意識をもっている生徒が多く見られる。	・古典への苦手意識をなくすために、今後扱う古典作品について映像資料や学習漫画なども取り入れた授業展開を行う。 ・ただの知識としての古典作品学習ではなく、現代社会との共通点や相違点を発見させたり、自分が登場人物の立場だったらどう考え、行動するかなどを話し合わせたりするなど、身近に感じさせる授業を実践する。
話すこと・聞くこと	平均正答率は、市の平均よりも2.1ポイント、県より1.3ポイント下回っている。 ○聞き取り問題については県の平均と同等であった。これは定期的に聞き取りの小テストを行い、聞き取りのポイントを理解し実践している結果と思われる。 ●「情報と情報との関係について理解し、自分の考えが明確になるように、話の構成を考えている」という「情報の扱い方にに関する事項」との関連性もあり、スピーチ原稿を作成するに当たって必要な情報の取捨選択がうまくなされていないかった。	・聞き取りの小テストについては今後も継続して実施する。 ・「話すこと」については、伝える場面や相手に応じて適切な言葉遣いや長さ、内容の難易度など相手意識を持たせて指導する機会を増やしていく。国語の授業だけでなく、総合的な学習の時間と関連させながら実践できるようにする。
書くこと	平均正答率は、市の平均よりも13.9ポイント、県より16.6ポイント下回っている。 ○指定された文字数で文章を書いたり、比較対象となるものの特徴を判断することのポイントは高い。「情報と情報との関係について理解し、必要な情報に着目して内容を解釈する」項目との関連性がここでもあらわれている。 ●文章を書く設問については無回答の生徒が市・県よりも多い。	・一問一答式や簡単な設問に対しての解答率は高いので、このような設問は授業の中に今後も取り入れていく。 ・論理的思考力が必要で、なおかつ自分の考えを表現するとなると解答しようという意欲がなくなる生徒が一定数いる。このような生徒たちの苦手意識を払拭するために「書かざるを得ない」ような設定での課題を設定し、そこで表現したことが他者に受け入れられ、共有されることの喜びを感じさせる授業展開をする。
読むこと	平均正答率は、市の平均よりも1.7ポイント下回ったが、県とは同じポイントであった。 ○説明的文章と文学的文章の読み取りについては授業でも補助教材でも念入りに学習している。その結果の表れといえる。 ●「根拠を明確にして考える」項目についての正答率が若干低い。	・文章の読み取りや内容把握の学習の仕方は良好なので継続していく。 ・説明的文章や論理的文章の結論やその根拠に当たる部分を見つけ出す学習にさらに力を入れていきたい。

宇都宮市立国本中学校 第2学年【社会】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	地理	54.9	58.7	57.0
	歴史	52.6	58.3	56.4
観点	知識・技能	59.1	63.1	61.0
	思考力・判断力・表現力	46.9	52.5	51.1
	主体的に学習に取り組む態度	49.6	52.6	50.8



★指導の工夫と改善

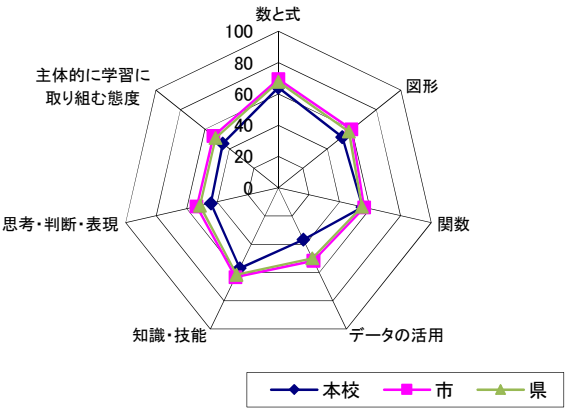
○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
地理	全体として、平均正答率は、市・県の平均よりも低い。 ○「日本の姿」の内容が、市と県の平均を上回る正答率であった。「世界の姿」の内容では、市の平均正答率を下回ったが、県の平均は上回った。 ●上記に挙げた「日本の姿」と「世界の姿」以外は、すべて市と県の平均正答率を下回った。特に、「世界各地の人々の生活と環境」の内容では、市の正答率と比較して、7.9ポイント下回った。いくつかの資料を組み合わせることで答えを導き出す問題に生徒が慣れていないように見受けられる。	・今後は、地理に関する資料の読み取りの活動を多く取り入れていく。特に、複数の資料を読み取ることに生徒が慣れていない現状があることがわかった。よって、複数の資料から答えを導き出す問題を、演習等で取り入れていく。 ・教科書の内容を教員がわかりやすく整理し、それを教える授業ではなく、生徒自らに課題を設定させ、それらをグループ等で探求していく授業の時間を増やしていく。 ・「思考力・判断力・表現力」の観点が低くなっているの で、既習した内容を利用し、新しく学習する領域とうまく組み合わせて授業を構成していく。また、振り返り等で自分の考えを表現する活動の時間を増やしていく。
歴史	全体として、平均正答率は、市・県の平均よりも低い。 ○「縄文時代～古墳時代」の内容の知識を問う問題の正答率が他の時代と比べて高い。 ●「飛鳥時代～平安時代」「中世の日本」の2つの領域では、正答率が市・県の平均よりも低い。特に「中世の日本」の内容での正答率は、市の平均正答率を7.1ポイント下回っている。普段の定期テストでは対応ができていた生徒も、今回のテストのように時代の範囲が広がると、それにうまく対応できず、正答率が低くなっていると考えられる。	・地理と同様に、生徒自らに課題を設定させ、それらをグループ等で探求していく授業の時間を増やしていく。 ・地理・歴史といった分野を横断するような視点を授業に入れていく。 ・苦手意識を減らすために、問題演習の時間を現在よりも多く確保し、生徒に問題に慣れさせる機会を増やす。 ・「思考力・判断力・表現力」の観点の点数を上げていくために、ディスカッションや振り返りで自分の考えを表現する機会を増やしていく。

宇都宮市立国本中学校 第2学年【数学】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	数と式	64.0	69.3	67.7
	図形	52.1	59.8	57.7
	関数	55.1	56.2	54.7
	データの活用	36.8	51.6	49.9
観点	知識・技能	56.9	63.2	61.5
	思考・判断・表現	44.2	53.5	51.4
	主体的に学習に取り組む態度	45.4	53.0	51.2



★指導の工夫と改善

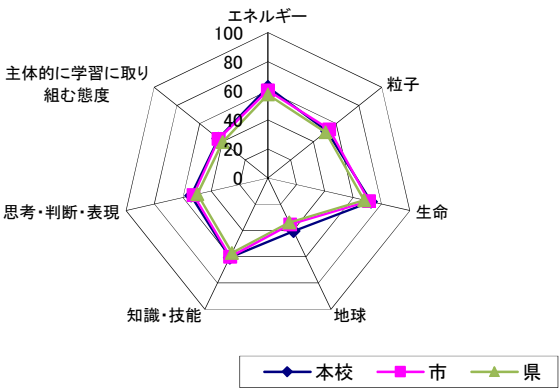
○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
数と式	平均正答率は、市・県の平均よりも低い。 ○数の四則演算の問題の正答率は県の正答率とほぼ同じである。 ●文字式・1次方程式の問題の正答率は県の正答率よりも低い。	・文字式・1次方程式の解き方についてのルールを再確認するために、授業で問題演習をする際は学び合いの活動を実施し、インプットとアウトプットを意識した指導していく。
図形	平均正答率は、市・県の平均よりも低い。 ○おうぎ形の面積・球の表面積を求める問題の正答率は県の正答率とほぼ同じである。 ●底面積の等しい円錐と円柱の関係についての問題は県の正答率よりも低い。	・各図形の面積や体積の公式は覚えることができるので、そこから求まる数量から、図形同士の関係を考える問題を通して、図形問題の理解を深める指導をしていく。
関数	平均正答率は、市・県の平均に近い。 ○比例の問題については県の正答率とほぼ同じであり、無解答率もほぼ同じであった。比例の関係でのx、yの値の変化の関係について理解している。 ●反比例の関係の表をもとにxの値からyの値を求める問題については県の正答率よりも低い。	・比例と反比例の違いを再確認する。 ・関数の基本である「表・式・グラフ」の関連について考えさせる指導を継続していく。
データの活用	平均正答率は、市・県の平均よりも低い ○2つの分布の傾向を比べるために相対度数を用いる理由を理解しているか確認する問題の正答率は県の正答率とほぼ同じである。 ●相対度数の問題や2つの折れ線から読み取った傾向から説明をする問題は市の平均から大きく下回っている。	・資料から様々な情報を読み取るため、単元内で登場する用語の意味をおさえ、何を求めたいのかを明確にして解けるように指導をしていく。

宇都宮市立国本中学校 第2学年【理科】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	エネルギー	62.6	60.3	57.4
	粒子	51.8	53.8	50.7
	生命	72.6	71.2	67.8
	地球	40.4	35.3	33.8
観点	知識・技能	60.5	59.9	57.0
	思考・判断・表現	54.3	52.4	49.7
	主体的に学習に取り組む態度	43.6	43.3	39.8



★指導の工夫と改善

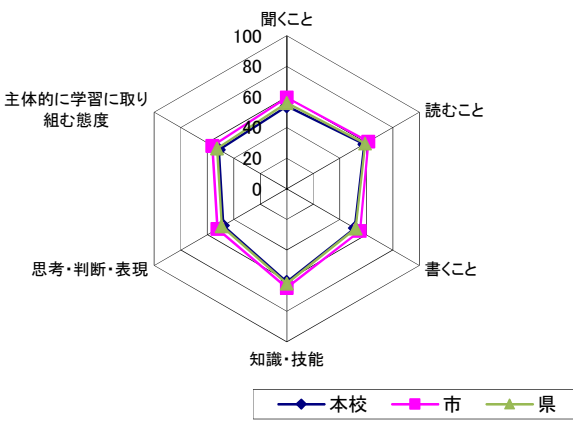
○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
エネルギー	平均正答率は、市・県の平均よりもやや高い。 ○「光の性質」が高く、「音の性質」「力の性質」はほぼ同じである。	○ピンホールカメラやストローのリード等、生徒の興味・関心を高めるような導入を継続していく。 ○オシロスコープアプリをスマートフォンにダウンロードして、大型テレビに提示した。今後は一人一台貸与パソコンを利用し、音を視覚化することを充実させる。 ●おもりがばねを引く力については、問題文を正しく理解することが大切である。文章の理解・表現について、教科横断的に指導していく。
粒子	平均正答率は、県の平均よりもやや高く、市の平均よりもやや低い。 ○「身のまわりの物質」「物質の状態変化」は市平均とほぼ同じである。 ●「気体の性質」「水溶液の性質」では市・県平均より低い。実際には見えないものを、視覚的にイメージすることについて課題がある。	●カードやパソコンを活用して、粒子を視覚的にイメージできるようにする指導を充実させる。 ●濃度の計算に課題がある。分数・小数の計算について教科横断的に指導していく。
生命	平均正答率は、市・県の平均よりもやや高い。 ○植物の分類は市平均よりもやや高く、動物の分類は市平均とほぼ同じである。	○本校は自然環境が豊かであり、生徒の生物への関心も高いように感じる。一人一台の貸与パソコンを使って校庭で生物を動画撮影したり、近隣の田んぼで採集したミジンコで顕微鏡観察を行ったりした。これからも実体験や身近な話題を大切にして、生徒の興味・関心を高めていく。
地球	平均正答率は、市・県の平均よりも高い。 ○「火山」「地層」は市平均よりも高く、「地震」は市・県平均よりも低かった。	○授業では、柱状図を紙製の模型で示して立体化し、丁寧に説明した。平均正答率は市平均とほぼ同じであるが、正解率をもっとも低かった。これからも基礎的な知識・技能をアウトプットの繰り返しにより定着を図るとともに、思考する機会を設け対話による学び合いを継続して思考力を育成していく。

宇都宮市立国本中学校 第2学年【英語】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	聞くこと	54.0	59.6	56.1
	読むこと	58.4	61.6	59.1
	書くこと	51.3	55.2	51.9
観点	知識・技能	60.9	64.7	61.9
	思考・判断・表現	48.0	52.4	49.1
	主体的に学習に取り組む態度	51.2	56.1	52.5



★指導の工夫と改善

○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
聞くこと	平均正答率は、市・県の平均よりも低い。 ○さまざまな英文の聞き取り、英文の概要や要点を聞き取る問題では、県の平均を上回る正答率であった。授業の中で、言語活動に目的・場面・状況を設定して活動に取り組ませたことで、話し手が何を伝えたいかを考えながら聞き取ろうとする態度が育成されてきていると考えられる。 ●対話の内容を聞き取り、適切に応答する表現を選択する問題では課題が見られる。聞き取った内容に対して適切に応答することについては、選択式であっても難しいと感じている生徒が多い。	・今後も、言語活動に目的・場面・状況を適切に設定し、話し手が何を伝えたいかを考えながら聞き取らせる活動を充実させていく。 ・簡単な話題について英語で自分の考えを表現したり、様々な英文の概要や要点を聞き取る力を基に、聞き取った内容に対して自分の意見を英語で表現したりする場面を設定していく。 ・1年生での学習を通して、英文を聞き取る能力の育成だけでなく、自分の考えや意見を英語で表現する機会を増やす。
読むこと	平均正答率は、県の平均よりもやや低い。 ○語形・語法・語彙の知識・理解を問う問題では、所有格の代名詞の問題を除いて全て県の平均を上回る正答率であった。授業の中で、品詞と語順について継続して指導してきた成果であると考えられる。 ●長文の読み取りの問題では、特に、読み取った内容をふまえて対話文を完成させる問題(活用)において課題が見られる。	・語形・語法・語彙の知識の定着を図り、活用できる技能を身につけさせるため、今後も、品詞と語順について継続して指導していく。 ・読み取った英文について、内容をふまえて対話文を完成させるなどの活用に課題が見られることから、聞くことと同様、読み取った内容に対して自分の意見を英語で表現させたり、簡単な話題について英語で自分の考えを表現させたりするなど、領域を横断した活動を設定する。
書くこと	平均正答率は、県の平均よりもやや低い。 ○情報に基づいて、3人称単数現在時制の肯定文を書く問題では、県と市の平均どちらも上回る結果となった。また、対話の流れに合った英文を書く問題でも、県と市の平均のどちらも上回る正答率であった。大半の生徒に基本的な語形・語法・語彙が身に付いてきていると考えられる。 ●3文以上の英文文では、自分の名前を自己紹介するという簡単な問題においても正答できていない生徒が多く、設問に対して無回答の割合も県・市の平均よりも多く、約3割となっているなど、課題が見られる。	・基本的な語形・語法・語彙の更なる定着を目指し、日々の授業での品詞と語順の指導を継続する。 ・助動詞の語法において、理解が不十分な様子が見られたため、2年生の助動詞の単元でcanなどの既習の助動詞についてもフォローアップを丁寧に行う。 ・英文を書くということへの苦手意識を改善していくために、1年生で習った基本文などを活用し、授業中に英文を書く活動を継続して設定する。

宇都宮市立国本中学校 第2学年 生徒質問紙調査

★傾向と今後の指導上の工夫

○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

○できるだけ自分一人の力で課題を解決しようとしている、学習して身につけたことは、将来の仕事や生活の中で役に立つと思う、生徒の割合は県の平均より高くなっている。生徒が学習することの意義を肯定的に考えられるよう今後も育てていきたい。

○授業で分からないことがあると、先生に聞くことができる生徒の割合が、県の平均より5ポイント高い。今後も生徒が質問しやすい雰囲気を持続したい。

○学級活動の時間に、友達同士で話し合っクラスのかまりなどを決めていると思う生徒の割合は、県の平均より5ポイント高い。学級の生活ルールを決める場合、教員主導ではなく、生徒自ら考え話し合える集団作りを今後も続けていきたい。

○毎日朝食を食べている生徒の割合が県や市の平均より高い。朝食は午前中の授業の集中力を支えるものなので、今後も保護者と協力して継続していきたい。

○自分の行動や発言に自信を持っている、誰に対しても、思いやりの心をもって接している、生徒の割合が県や市よりも高い。自己肯定感を高く持ち、仲間の人権も大切できる指導を今後も続けたい。

○家の人と学校でのできごとについて話をしている、将来のことについて話すことがある、あなたがほめてもらいたいことをほめてくれる、生徒の割合が県と市の平均より高い。生徒が家庭で大切にされ、親子関係が良好であることは大変素晴らしいことである。今後も個別の相談に留意しながら家庭と連携していきたい。

●家で、自分で計画を立てて勉強している・学校の宿題をしている・学校の授業の予習をしている・復習をしている・テストで間違えた問題について勉強している、家で勉強するときに同じ時間で取り組む、生徒の割合が、市の平均よりも10ポイント以上低くなっている。宿題への取り組み方や、テスト後の振り返りなど、家庭学習の質を高めるような指導、助言を続けていきたい。

●学校の授業時間以外に、30分より少ない・まったく勉強しない生徒が、市の平均より15ポイント多い。これは、家庭との連携が必要なので、保護者面談や保護者会で継続的な学習への取り組みを呼びかけていきたい。

●授業の中で、目標が示されている、授業の最後に学習したことを振り返る活動を行っている、ノートに学習の目標を書いている、生徒の割合が県や市の平均より低い。本年度の重点的な取り組みとして行っている宇都宮モデルによる「はっきり！じっくり！すっきり！」とした授業を教員が更に徹底する必要がある。

●1日あたりのテレビやDVD、動画視聴、テレビゲームの時間が4時間以上の生徒の割合が、県や市の平均より10ポイント程度高い。これが、家庭での学習の取り組み方と関係すると考えられる。家庭でのインターネットに接続できる機器の使い方については、もっと家庭で話し合いを持ち、学習時間を確保できるように呼びかけていきたい。

学力向上に向けた学校全体での取組

★学校全体で、重点を置いて取り組んでいること

重点的な取組	取組の具体的な内容	取組に関わる調査結果
宇都宮モデルに基づく授業改善	生徒にとって「分かる授業」を展開するために、宇都宮モデルに基づき、めあての明示やペアワーク、グループワークなどの学習形態の工夫、授業の終末での学習内容の振り返りを全教科で実践している。	「授業の中で、目標が示されている」の質問では、肯定割合が90.7%、「授業の最後に、学習したことを振り返る活動をよく行っている」の質問では、68.9%と、いずれも市や県を下回っており、昨年に引き続き教職員の共通実践に課題が残る結果となった。 宇都宮モデルに基づく授業改善に向け、この結果を共通理解するとともに、教科部会の中で1学期の授業を振り返り、めあての提示、振り返りの時間の確保、発問の工夫などについて見直す機会を設ける。
学びに向かう力の育成と学力の向上	定期テスト前の2週間、「家庭学習ががんばりの記録」を利用し、家庭学習の時間を記入されることで、生徒自身の学習への取組状況を可視化し、個に応じて指導助言を行っている。	「授業で分からないことがあると、先生に聞くことができる」の質問に肯定的な回答をした生徒の割合は、75.7%と、市・県の平均を上回った。また、「授業を集中して受けている」の質問では、およそ市・県と同程度と、授業に対する姿勢や取組についてはおおむね良好であることが分かった。 授業への取組は全体としては良好であることから、学習内容を定着させるために家庭学習の習慣化と充実を図り、学習に対する意識の向上に努めていく。
家庭学習における学習内容の復習の習慣化に向けた指導の工夫	全学年で家庭学習の習慣化に向けた取組を行っている。また、復習するポイントを生徒が整理しやすいよう、各授業で、その日の学習内容の振り返りを行っている。	「家で、学校の授業の復習をしている」、「家で、テストで間違えた問題について勉強している」の質問において、肯定的な回答をした生徒の割合が、市や県がおよそ70%程度であるのに対し、本校第2学年では、いずれも50%をやや超える程度と、家庭で学習内容の復習をしている生徒が少ないことが分かる。更に、学校の授業時間以外での平日の学習時間が30分以下である生徒は23.5%、うち全くしない生徒は8.4%と、いずれも市や県の割合を大きく上回り、休みの日ではそれぞれ40.3%、17.6%と、家庭学習の習慣自体が身につけていない生徒が多いことが分かった。 学習の習慣化を図るため、学級担任・教科担任が連携した継続的な指導が必要である。

★学校全体で、今後新たに重点を置いて取り組むこと

調査結果等に見られた課題	重点的な取組	取組の具体的な内容
平日にテレビ、DVD、動画、ゲーム、携帯、スマホに費やす時間が3時間以上である生徒の割合が市・県と比較して1.5倍程度の割合と非常に多く、家庭での時間の使い方について見直させる必要がある。	左記の状況を保護者・生徒へ伝えた上で、家庭と協力して改善を図る。	保護者に現状を認識してもらう機会を設けるとともに、学校としても、各教科で適切な宿題を課すなど、家庭での復習が習慣化するような働きかけを推進していく。